

高校における進路指導と生徒の進路意識の関連に関する

実証的研究—「生き方指導」と「受験指導」の効果・影響を中心に—

望月 由起 (お茶の水女子大学大学院)

<問題関心>

本研究は、高校における進路指導が生徒の進路意識に与える教育効果を進路指導の実態を踏まえた上で実証的に考察するものである。

この研究は、学校効果研究の一環をなすものと言えるが、この領域においてアメリカを中心に取り組みられてきたのは、主に学力面についてであった。しかし、日本の学校はアメリカの学校のように学業達成のみをアウトプットとして期待されているのではない。日本の学校教育研究においては、学業達成からだけでははかれない「生徒指導」や「進路指導」などの側面もみていくことが重要な課題である。

一方、教育社会学における進路研究は選抜研究の観点から行われており、学校効果の観点は比較的薄いものであったと言える。そのため先行研究では生徒文化や、アピリティーグループのような学習集団の組織化が、進路選択に対して潜在的に及ぼす影響には着目してきたが、進路選択を指導しようとする進路指導活動そのものの効果については考察してこなかった。

しかし近年は受験指導が批判され、新しい学力観に基づいて、あり方生き方を考えさせるような指導への期待が高まっている。それゆえ、これまで行われてきた受験指導重視の進路指導や、新しいタイプのあり方生き方を考えさせる進路指導が、生徒の進路意識にどのような影響を与えるのかを解明することは教育改革の意義を評価する上でも重要な意義がある。

<本研究の課題>

本研究では以上の問題関心に沿って、いわゆる「生き方指導」が生徒の進路意識に与える影響について検討する。また、併せてこれまで批判の対象となってきた「受験指導」の影響についても検討したい。

以上の目的を達成するために、以下の2つの分析課題を立てた。

1) 進路指導の実態調査

第一の課題は、各校の進路指導がどのように類型化できるかを明らかにすることである。

特に注目するのは、そもそも「生き方指導」と「受験指導」が、現在言われているような位置にあるのか、つまり、その2つのタイプの指導が一軸上に分極化している(一方の指導を行う高校では他方の指導を行わない)のかを解明することである。このことにより、「受験指導」を批判し「生き方指導」を推奨する現在の議論の構図が実態を正確に捉えたものなのかを検証する。

また、併せて分析から見出された指導類型と学校の諸属性との関係を分析する。とくに、これまで学校組織を規定する要因として注目されてきた学校階層上の地位の規定力について見ていく。

2) 進路指導体制と生徒の進路意識の関連

第二の課題は、第一の分析から見出された進路指導の各類型と生徒の進路意識の関連を解明することである。本研究では、とくに近年の進路指導をめぐる議論でキーワードとなっている「進路展望の長さ」「進路への関心」「高校卒業後の進路選択」の3点に注目する。

<調査方法・対象>

第一の課題については、A県の全普通科高校を対象とした「進路指導実態調査」の結果を用いた。調査時期は1999年6-7月。調査対象校は229校で、回答を得られた学校数はそのうちの77.7%にあたる178校である。

第二の課題については、各類型ごとに2校ずつ(偏差値50程度の県立共学及び私立女子校)、計6校を選び事例研究を実施した。調査項目は、各校の具体的な進路指導体制や進路指導に関わる活動の内容および生徒の進路意識である。前者については進路指導担当教師からの聞き取りにより、後者については1年生と3年生を対象とする質問紙調査による。2つの学年間の意識

の差異を見ることで、各校の進路指導の効果を考察する。調査時期は1999年7-9月。

<本研究の知見および考察>

1) 進路指導の実態調査

①高校の進路指導の類型化

質問紙の結果を因子分析にかけたところ、高校の進路指導体制を類型化する因子として「生き方指導重視」と「受験指導重視」の2因子が抽出された。そこで、この2因子をX, Y軸とした平面上に各学校の因子得点をプロットしたところ、両指導の実施率は直線上に散らばっている(受験指導をしていないところが生き方指導をしているという関係にある)わけではなく、むしろ「両指導ともに重視せず」型が全体の1/3以上を占める結果となった。

この結果より、A県の普通科高校の進路指導体制は、(1)「生き方指導重視」型、(2)「受験指導重視」型、(3)「ともに重視せず」型の3つに類型化できることが分かった。

②進路指導と学校の属性の関連

以上の3類型は、各学校の属性に規定されている。すなわち、県立では「ともに重視せず」型が多く、私立には残る2つの類型が支配的である。また、共学か男子校か女子校かの区分で言えば、共学は「ともに重視せず」型が多く、男子校は「受験指導重視」型が、女子校は「生き方指導重視」型が多い。

しかしこれまで学校組織を規定すると指摘されてきた各学校の偏差値ランクには、進路指導類型はさほど規定を受けていないという結果となった。

この結果より、これまで学校組織は学校階層上の地位に強く規定されると考えられてきたが、進路指導組織に関しては、他の属性の規定力の方が大きいことが明らかとなった。

2) 進路指導類型と生徒の進路意識の関連

調査対象となった6校について、学校の進路指導体制と生徒の進路意識の関連を分析したところ、「進路展望の長さ」「進路への関心」「高校卒業後の進路選択」の全てにおいて、「生き方指導重視」型の2校では高い効果が見られた。しかし、それと同時に、マイナス効果が予想された「受験指導重視」型の高校でもプラスの効果が示された。むしろ、プラスの効果が見られなかったのは「ともに重視せず」型であり、他の類型の学校とは際違った違いを見せた。

受験指導をめぐる議論での指摘と異なる結果となったのは、これまでの議論では進路指導を「生き方指導」対「受験指導」と対極に捉えてきたために、その効果もプラスかマイナスの対極に捉え、「生き方指導=善(プラスの効果)、受験指導=悪(マイナスの効果)」と指摘をしてきたためと思われる。

いずれにせよ、今回の調査では進路に関して何らかの指導をすることは、生徒の進路意識にプラスの効果があることが示された。

<今後の課題>

本研究で対象とした高校の生徒の卒業後の進路を今年7月の時点でみたところ、「生き方指導重視」型の高校に通っていた生徒には、「進路未定」が他の類型の高校に比べかなり多いことが判明した。

加えて、この類型の高校の卒業生には、すでに進学後(就職後)に不適應を起こしているケースが多いことが、進路指導担当教師の話からうかがえた。その中には、高い進路意識を持ちながらも、何らかの理由(大抵は学力の問題)で志望通りの選択ができなかった(自己の理想化)生徒や、志望どおりに進路選択をしたものの、思い描いていたものと実状が違うと感じた(進路先への理想化)生徒がいるということである。

本研究の結果からは、生き方指導にせよ受験指導にせよ、進路指導が生徒の進路意識にプラスの効果を与えるという知見が得られた。しかし、上記の事態を踏まえると、果たして「進路意識を高めること=適切な進路選択を可能にすること」と言えるのだろうか。

このことは、進路指導の効果をどのようにして評価すべきかについての重要な指摘である。1つは、進路指導の効果は進路意識だけでなく、実際の進路選択やその後の適応状態までを視野に含めた検討が必要だということであり、もう1つは社会の側からこの問題を考察する視点である。選抜研究の観点に立つ進路指導研究が問題にしてきたことは、学校の社会的機能は、人材をそれぞれにふさわしいポストに配分することだということであった。社会全体がシステムとして機能するためにはその結果配分された人材がそのポストに適応し、与えられた役割を果たす必要がある。こうした観点から進路選択のあり方を評価する視点もまた、個人的な自己実現といった視点とともに求められるであろう。